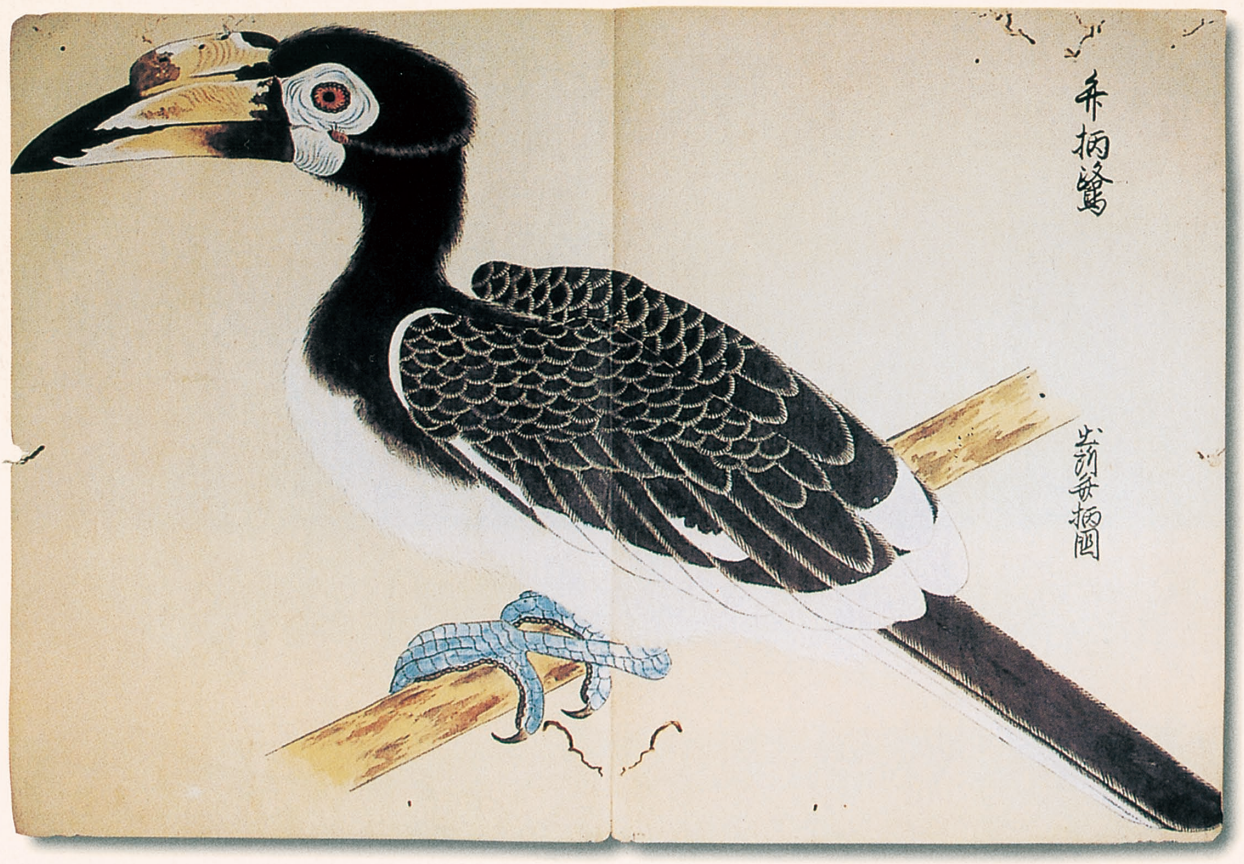
松代藩文化施設管理事務所だより

第13号

六連銭

平成15年3月

〒381-1231　長野市松代町松代4-1（真田宝物館）



異国写鳥図

唐蘭船によって舶来した鳥獣を描いたもの。舶載した品は御用絵師などによって記録され、幕府へも献上された。長崎で何らかの役職を担った人物であろうか、「正斎蔵」の印がある。

江戸時代の博物学
―真田家旧蔵資料から―

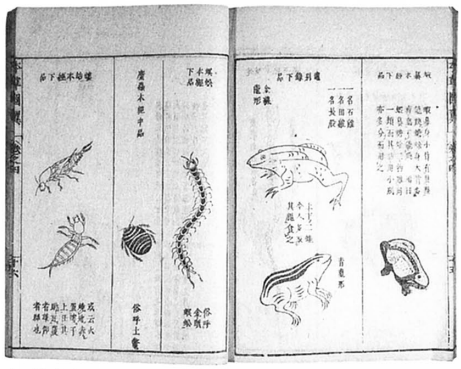
博物学は、生活に必要な薬物や食物となる自然物に関する学問である本草学から発展していきました。特に江戸時代における博物学の発展は、中期以後、幕府諸藩が殖産興業政策を奨励したことによる物産学、名物学が盛んになったことによります。

真田家においても博物学に関する多くの資料が残されており、自然物に対する興味・関心の高さや学問への造詣の深さを知ることができます。

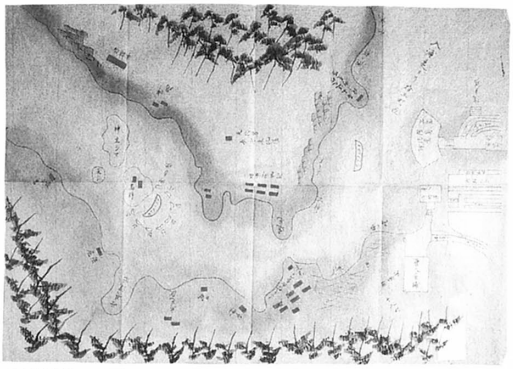
博物学の広がり

8代将軍・吉宗の時代である享保期（1716～1735年）には、積極的に殖産興業策がおしすすめられました。享保年中には幕府の採薬使・植村左平次が全国各地の薬草調査を命ぜられ、ここ信濃にも訪れました。

また、外国との貿易を禁じられた鎖国時代にあって、貿易の許されたオランダ・中国からは、長崎の出島を唯一の窓口として海外の学問やさまざまなものが伝えられました。博物学もそのようななかで大きな広がりをみせたのです。



本草綱目
明代の百科事典的な本草書。日本へ最初に伝えられたのは1607年という。動植物、鉱物などの自然物を16部に分類し、編成している。

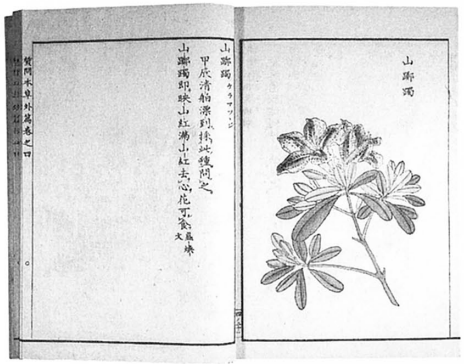


長崎港の図
鎖国時代にあって、唯一オランダと中国との貿易の窓口として開かれた港の図。出島や唐人屋敷などが描かれている。

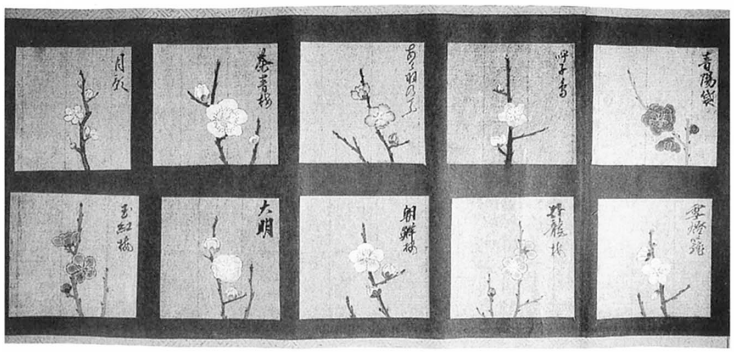
収集された資料
《自然への興味》

江戸時代、特に流行の先端であった博物学に関心を寄せていた大名を「蘭癖大名」と呼びますが、真田家もそんな一大名であったと考えられます。

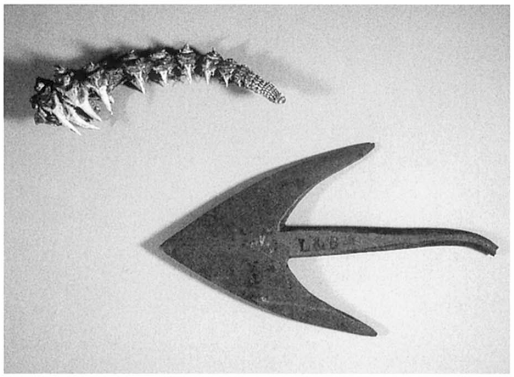
真田家旧蔵資料の中には、貝類・名所天産物の採集品やカラフト島の細工物、鰐の歯、黒曜石、さらには百科事典的な本草書など多くの資料が伝えられています。また、藩主自らが描いたさまざまな品種の梅花の図譜なども残されており、いかに自然物に興味を持ち学んでいたのか、その一端を垣間見ることができます。



質問本草　天保８年　中山呉子善著
彩色絵入りの本草書。「松代医学文庫」の蔵書印があり、医学関係図書として利用されたことがわかる。



梅花譜　８代藩主幸貫筆
様々な種類の梅の花を花の特徴をとらえて描いており、博物学的な側面の強い画。



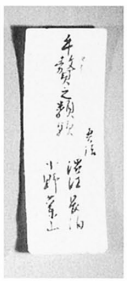
銛（もり）と鰐（わに）の歯
魚類を捕獲する道具である銛の先端部分と鰐の歯。

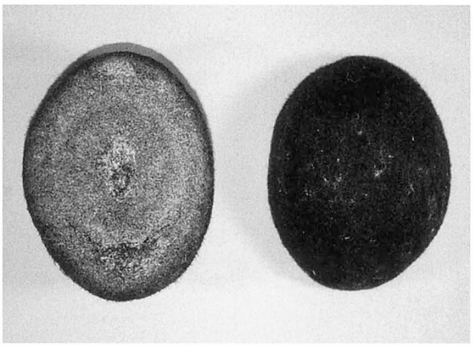
桜譜　矢沢家寄贈資料
二帖の絹本に１３６種類の桜が描かれている。鑑定は江戸の白桜亭主人・久保勝章、写生は花元・久保勝綱と記されている。

《珍品・珍獣への興味》

稀にみる珍しいものや生き物へそそがれる興味関心は、いつの時代にあってもだれにとっても変わりがありません。ここ最近、アザラシの「たまちゃん」ブームが起こっていますが、江戸時代においてもこうしたあまり見慣れない生き物の出現が、世間を賑わしていたことが数々の資料からわかります。また、博物学者による鑑定書なども残されており、その力の入れようも大変興味深いものがあります。

海獣（かいじゅう）の瓦版と海雷虎（キシャ）の図
鎌倉辻堂ケ浦で漁師の網にかかった『海獣』を西両国において公開するといういうもの。一度見ると「無病延命」「諸願円満」で幸せになれると宣伝している。

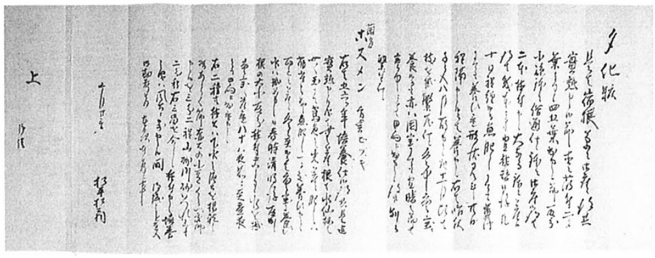




がぜ玉
文書には、海辺近くの女性の話でがぜ（ウニの方言）ではないかと記されている。一方、有名な博物学者である渋江長泊や小野蘭山によると「牛のいぼ」ではないかと鑑定している。

大名の情報ネットワーク

博物学に関心を寄せていた大名たちは、互いに図譜の貸し借りを行うなど、さまざまな情報交換をおこなっていたと言われます。江戸の旗本で、花菖蒲などの育種に業績をあげたことで知られる松平定朝とは、花の培養についてやり取りをした書簡が残されており、他家との交流の一端を窺わせます。今後さまざまな記録を追っていくなかで、さらにその広がりをあきらかにしていくことが課題でもあります。



松平松翁書簡　嘉永４年
松平定朝（松翁）は江戸の旗本で、花菖蒲などのさまざまな花の育種に業績をあげた人物。花の培養についてのやりとりの様子がわかる。

貝類採集品

松代名所押し花

壇の浦平家蟹

資料紹介

『貝類及名所天産物採集品』

『貝類及名所天産物採集品』は金粉で縁取りされた十三段の黒漆塗の収納箱に納められている。箱の四方の側面には「三花珠樹・五雲開・海上雙飛・白鶴来」の文字があり、蓋には波に二羽の白鶴が舞う様子が蒔絵によって描かれている。

その内容品であるが上十一段には貝類が、下二段には屋敷の庭や全国名所の押し花・押し葉・小石・海藻など様々な珍しい天産物が納められている。その数はざっと数えて千点近くに及ぶ。貝類一点一点には名称を記した付箋が添えられており、なかには「柏崎貝石」「江の嶋小貝」など採取した場所が記されたものもある。また、押し花などの天産物は「松代名所おし花品々」「白川御庭おし花」「江戸所々のおし花」「三十三所おし葉」「名所石」などの包みに分類され、さらに一点ごと小さな色和紙や刷り物の和紙に包まれ、その産地やいわれが記されている。なかには雨の晴れ間に採取したので思うようにいかなかったことや旅の途中、茶屋などで小休止したときに採取したエピソードも記されていて、その光景が目に浮かびほほえましい。

では、これらはだれが採集したものか。それを辿るヒントとなるのが包みに記された覚書である。「白川御庭おし花」の包みには、「二ノ丸紅葉」「白川御庭山さくら」など白河小峯城の採集品が数多く納められており、白河とゆかりのある人物が考えられる。真田家では六代幸弘の夫人が白河松平家より嫁いでいるし、八代幸貫も松平家より養子入りしている。さらに、採集の時期を示すものとして「浅間焼候灰」「浅間焼石」などが数点存在し、天明三(一七八三)年に大噴火したときのものであろうことを窺わせる。それは六代幸弘の存命の頃と重なる。幸弘は隠居後諸国を旅していることでも有名である。また、幸貫の道具類を記した帳簿にも天産物や貝類の採集品が多数記載されており、このことについては今後解明していくべき課題でもある。

また興味深いのは、「上野宮様江も献上申し候」「飛騨守より貰い申し候」「貞寿より貰い候」などさまざまな人物との交流を示す添書きである。博物学的な資料価値のあることは言うまでもなく、博物学を通じた大名の交際の一端をも知り得る貴重な資料なのである。

(北村　典子)